河海抄

箒木 空蝉 夕顔 二

特
へ利/2
1272
2

1272
2

河海抄巻第二

正六位上物語博士源惟良撰

第二 箒木

はゝき木といふはそのはらやふせやにおふるはゝきゝの
光るし名のみことゝしういひけたれ給ふとかおほかなるに
光源氏といふ名ことことしく是撥舞によそへ
てつかひさるへし此巻はしるしにいひけることをかきあつめて
物くるはしき歌の下にてもかくまさな事ともしるし給
ならひによりてそへたるにやとそ
ときこゆめり

一
遠日本紀 文士多數奇 白氏文集
人のものいひさかなさよ
うらいもなくよ白ふるん女はたれ人のものいひさかなさよ

海のたゝく

皺魃 怪仙塞 又皺眉 月上 真立 海のたゝく たゝくは也

〻なるゝはかしこさもやみて

顰 人の心のうらみは極まりぬれば顔も見にくし 朱雀院と申

またの少将のわからぬなし

一説云業平朝臣七条にゐる宿のしんに詠む事也に一

宿と仍有此名云々 又英明中将と号更中将之又此

乃少将と云ふ人の給ひ事の好也 人々みな京の人の

のかたくなしさもおもしろくなくさめの事の

光源氏のまゆのたゝく事にいひしを

こゝの也 式説更不勝性と云 何にも足給

志のふのゝしのふるゝかやとうたかひ

たとへ 春日野の若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられす

なよ竹のかはらぬなさけ

霖 尒雅曰三月以上日霖

うちしめり物のこほれて

物忌事　義浄三蔵奉詔譯

夫以迦毗羅衛國在世男名胡其國中有桃林東西南北三
十六町也其中有桃木高卅五丈也尭枝方〻各卅五丈也其上
平〻辟如鏡面其下有一大鬼王号曰物　其鬼王力他鬼神
不寄就中大通鬼王假百里之内参聞於事由小通鬼王跪
千里之外被令参聞於事由大鬼神王〻〻大鬼神王稽願言
衆生之中若有病若疾疫之難者令早差若有短命者延
其命若有無福者其福若有可堕地獄者抜難有　證
果者令證果如此有利益六趣之有情持寶吾名号者若
人宅物怪慿現悪夢頻示可蒙諸王宣之時臨其日吾名

立門其故他鬼神不令来入但書時讀之書之時尋得於陰
陽寮験師書吾名令持人如影可令守護
内裏御物忌之時参籠之人ハ色時ゟ来ほとの物忌は
れ字とハ木書柳枝を二寸ゐりに簡のほとの以冠纓にさゝる
或又左衛門袖に白紙に書て付る又は簾のはしにも付
但二月ハ不付之也又冠には物忌と書てみすにつけて付
冠にもさしも也花ハ無其事乃一名ことをりとかきことに
つまくらく目に言葉のまゝ也云々後撰貫之か序に
さゝらにしたちとそちらにはのめかしてかなかさら物忌乃人やそのかし
こいなるの冠にさしれ故也云々村上無其事ハ裏乃日にてうきこと
世軒端なにとよ常に物ハ思ふの事也

えつろ乃中将

頭中将 引入大臣男 母桐壺帝姉妹 清慎公 左大臣忠平公男 母宇多院皇女 歴蔵人少将兼 次中将事一同也

嵯峨天皇大同五年三月始置蔵人頭上兼蔵人頭従四位左衛門督巨勢野足従四位下中務大輔藤原冬嗣二人補之
執政臣息補蔵人頭例
忠仁公 天長十年十二月補蔵人頭同十一月十八日叙従四位下
元従五位下左近少将
昭宣公 天安二年十月補頭 貞観五年二月十日転中将 元従五位上左近少将
清慎公 延長八年九月廿五日補之 元右近中将従四位下
謙徳公 天暦九年八月十七日補之 元従四位下左近権中将
忠義公 康保三年正月廿五日補之

[illegible]

[illegible]

料理（シウライ） 遊仙窟
幹了（コサク） 日本紀 軌制（ヲサメ） 同或通事 楚剣漸々 項和名
長治天下 匡房説 蕃長 實親説 治也 優也
十住論云是偉病法芳無有大心非是丈夫志幹之言也日本紀

云成務天皇四年甲戌二月始定諸國境各分尋邑詔曰自今
以後國郡立長縣邑置首即當國幹了任國郡之首長是
為中區之蕃屏　又云幹了者國長也
伊勢國府云まうねつるはなきにしかるをわかつ歩る崇と
つくえつると躬恒假名序云あつし我さしくち紀於
くさくたれぬる
忠峯長守古ゝ
ごれへりの事みつさらりたゝしくちくしおもかと
此詞日本紀にもあらはれより又伊勢物語大和物語なとに
みえたる事をよみけるくちりくさのへき也大略
ハ凡衞なとよりは様乃詞より難一変ス名詞清輔袋草紙奥義抄
みえたゝしくハ説くよりよりて云ふ源氏物語河海抄祖に
云ふより又風ハつゆりにたゝしくえてハ首劉宋也氏物
ましきれいへともおさしくえてより説くこの

但たゝしくきハ長くして延たゝしく其体行つるへきさん
じれまさここに
かふさくかりりくなむしつまりんえるのとみゆ心益つふ
あいるかくへきしりつ　　也序論
とろのえて　名鏡　日本紀　式　自認八雲抄云ふれ　ある也
指遠輔相四十九日
本師人死してふりより五日こともやとる人にえれ次
秋風乃吹山つちはちのえて吹よりちりぬりもちらむ
貫之
云ふ梅秋ちきかさ菊乃花とのゝえつよつ益つりけれ
恵心僧都作極樂六時讃云ふくしに独を谷のえ
悪
思ひしむされし　うらしかつたる
おほちろのつ御かた　厨子　大木　大都
二乃まち　次乃海ろとらふなり
んいつく　八雲抄云とくはりせ

古しへ朝恒
ふるくにみつやわたらん跡あるのとしのよくよそ白菊也
我なりけり　足下
秦始皇本紀曰足下驕恣　注曰蔡雍曰群臣士庶相共
言曰陛下侍者執事皆謙類也
られしきりとたしかに御也
三は座とめ字也これこへつゝれ下にはおして
たしかなれ
草書の体に書乃字は人への衣冠をき体草の字
は人乃道をも恣行乃字はわりく楷なといふ
其奥ありたりしるいの瀧ともみれはわかりられ
しかなれはけれはなさたり
それ身まからつさ後は其人の為よみまくの宜也
そも何にもしよ　それなる也

にりてれはさ紀こそもの何にの中をかの様は
尖(シイサキ)　草堂長よ未嫁の残　苗月
楊家有女初長成　養在深窓人未識　長恨
ゆるりこ　行才　行豪　日本紀
うられはさ　穏令席　付字割おたや名残をもれ
ならへ楷へつもく　虫付山風にゆりてれ
思くるさし　なり也　戎統蘭る
ゆたらるをくらわれこれはとつまりと御世つゐとは
ぬるちてもくしれへしくらは御りめ
つまりてくさとなろさとは何かる始まりされ書面
なすよ人乃公もこの色こさとつゆ也
しるしなをれ宗らい
氣(ケヒ)日本紀　耿暢　新儀未絶　景氣

くるみくて　昇也　選叙令
たゞ人のしらるゝなとしてかりのかうたり
直人謂諸大夫之中院事書にたゞ人とは月卿云
伊勢物語云たゞ人ならく母なし在原なり
けらめ　紹同　楊同　訓イナヒルニ
世よりかうて　便也　万葉　鶴寸月
うちいで　まうけ也
なり此しるうの布うちはりしね
不下堪 わらぬ也　或不堪 家わらぬはわるゝ もと地体のなり
随所可得宜一旦告端初也
生有達ふ祈也或云なりしくへき
云々位の位　宗明抄

此条議　前宮事也　在位より
ともにて　潜憲 くに神さしわかなくさ葉かさたの在り故にはなかり
宋りて納りや
あ海のおさらりけなりなせきやうひと月公私今
しにわかれくわをいえうりとふのよ耐しとか
ん得へし祭の事にはりいいとのりかと公とや
のかくなくさかのゑとあかりくゑゆなくなり
将　わるなりあれまつに　云也
はりうをまたるまさまて　不放捨也　西くわさらつくなる云をと
てかさうし志つさに　饍　和名 手中知　又冨饒
仁徳御宇　高きやにのりてみれ　新撰朗詠　煙立民の南とかさなるかり
あとへのいうしいやうにんとあ汝やしらてさかし

みな人のこゝろなり人の心のやうに林中抄様氏
をいふ也此うたしきしまのみちにいたるは女のまさのこと
たねとなれるかなはむかしのことをいふ也
なく心とて
八雲たつ出雲八重垣つまこめに　乃ねんれ
なよたけの御すゑ　歌のことの葉なり也
よりの歌を
火氣日本紀　火のおひたちのかみさわらせと紀紀にみえたり火のかみの火をとりてかむし給ふなり
又側歌　かぞへうたのつけ
からうたにたとへてみればいはゆるはるとさかへて
上以風化下下以風刺上　詩序
上合德以遇其下下懐忠信以事其上　史記
上之仁猶風靡草

世のなか家の中にあるしたしきべき人
国をおさめしとくものなれ家をおさめ
ふるくは先身をおさむるなり也詩序云一家之事繋一国事
ことなり左傳曰詩曰刑于寡妻至于兄弟以御于家
郡注曰詩大雅也言文王教自近及遠也寡妻嫡妻謂
大臣也
ことわざしげきものなればことさとにて
ものとくことなれはかうかねあるかたをおもひて
八雲抄云あふさきるさはわけもなきことなり
もとの海の
なにはの海をあらはにあつしてに　真
なにはかといふ心なり
みちなり　言語と葉をとらへてゐくる也

とゐはく　雲便無　云便　云為

古今長哥 たよりにもあらぬおもひのあやしきはこゝろを人につくるなりけり 絶ぬおもひ立やと

ちくしよ
古今 あふく海よ寄らるくりゆく我絶ハ身ともまてハ行定

とみつさかなの

うちよみすられ　一説云うちよくわ絶えたる

ことのなかにある花たえぬまもしき人の

殊中 ことのうち　異中 日本記 あらぬ事とな兄　或繕中 宗明抄

みちはこからぬさこれ絶つゑこうし

云義相　又云貧相　主人妻 このかみ 花仙家 家童子 伊勢物語 兵部卿

伊勢物語云 若男ありけるが宿にたへそうくはなのあるを

らはかなる旅よ家をうしろみさしとの人つさて

人乃くみ色つみなり

なかなかしくて

淺乃さし浅のなかみさしくて袖ハ濡るに浅く

こ同し淺しくにハ袖ぬらし乃瀬ハさしかゝる

これハ底へはなれと云也八雲抄ハ河おちてと云也

ほしつゝに淺く思さ也　未學之夜　淺如水莊子

ゐるふかよ云ゐさ　こゝのちハ勝義同し云　或ハくりしさせ云　水原抄

一説古乃絶たるもめしさし人の又云小乃絶たるすく

なくう絶え

あさみと海もと　真事

そハくしく　側そくつさまハみさのうつ見ゆる

く海なき絶つハも　曲 日本記 隈 能 阿閇

ちそ
ぐうてふ人乃たよ海ことにもらくれはいらゝもる

絶らきの海しさ

倭人（ネヂケヒト）日本紀　論語注曰佞人口辞捷給数為民所憎者也　又曰佞ハ口才也　又曰佞人假仁者之色行之則違

万　ねしけしとハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後操

[illegible]

操（ミサヲ）心操せ[illegible]

[illegible]

[illegible]

海類　又海濱　日本紀[illegible]

海次　伊勢物語　ほ名寺

周太子泰伯仲雍譲才季歴隠荊蠻濱

[illegible]

古後逢　年老[illegible]女乃[illegible]也古ハ節（コタチ）　白氏文集　日本紀

後漢書注鄭玄曰礼記云后之言ハ後也言在夫之後[illegible]

逢伍家物語云[illegible]

後逢礼記乃文分明也但[illegible]

也云[illegible]

[illegible]

雑纂　西宗寺[illegible]

[illegible]

毛詩　走如　白氏文集　永　日本紀

[illegible]

むくつけきをふさくりてあくたつく心はほにてなれし
蜜房事なり
うちひそみぬらし　嚬蹙（ヒンシクトイタミヒソム）文選　古出（ヒソム）遊仙窟　出 月　万葉
人のうらむる時よ口のさけしわよる心也又老女ハ民
すかたをとしふすなり
百て家持　りしせよおいうらむとしくいしきとしれいてゝ憩ハ海と
八雲抄云もとし玉かも日本さらなり
みこもりに玉あるる雅なりて
ほかの字のうへに出まぬかりく例ハ露とおはつきく
みをしたん
みをつりしらぬ也　売蝶に ねさとへたるを
わかしねさとをつかしもなり
よをとり　便なり

万　みをつくしをりそこのおしきよとなさきこうへれん
あれらかたさこのしぬよかきらるくわまそてらぬなとつゆ也
たなのね舟のうさたわるぬゆし
観身岸額離根草　論命江頭不繋（ツナカサル）舟
古人又同此詩と哉なり此ゐ其心は物ならお出此詩登
荘常之詩の此に緒なのん文選おり泛乎若不繋之舟
荘子注又賈誼服鳥賦日野鳥入室主人将去請問于服予去何之
付合之予悠管見物待之濱適作
者之無趣勞力自愛之
うなつく　點頭（ウナヅク）式　領状 漢書　頷許 月 淮南子　領許　遊仙窟
むぬのくしぬらぬのさせよ成て紅りかなり
物定博士時名同先例未執仮令物合判者同事也
軽粧（ケサウト）日本紀　京極北政所 後一條 繫子 自筆なにそつらゆかりたつ勢い
みそしへきん一説云鴨のらうと句ふる時かこりて雅さそく

[illegible]月色

鴨の轉姿しくは将粧はうるはしき姿也

木の葉なくは　良匠如剣末　帝範

それにさされたるし

側身　こゝろは[illegible]形也

宿　日宿　宿老　月宿　雨宿　宿雪　宿月色

家にて居れは宿直して人の[illegible]

後ね宿に俳諧[illegible]

せされ[illegible]宿老[illegible]

[illegible]新後[illegible]

[illegible]

うれ[illegible]　調度

[illegible]

[illegible]柿本書[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]書[illegible]

[illegible]鬼[illegible]

[illegible]

韓子曰客為齊王畫者問之對曰狗馬最難鬼魅最易狗馬人所知也旦暮於前不類之故難鬼魅無形者不可類故易　文選曰畫鬼魅易成好畫狗馬難為好　三都賦

傔（スクヨカ）　菅家後集　[illegible]

[illegible]

[illegible]

吟苦支頤曉燭前　白氏文集

おほけなきこと[illegible]をあれはとつくへかとこそまつはれならて
寵 おほしかはれんかわさる物ごとの絶えぬことをはれたつくて
むつごと。 親言
むかしよりつたへきたれるに[illegible]物[illegible]
やう[illegible]下賤より
しるしのことのはを云ひならはしたる事也古今和歌集より
ことし[illegible]かはとにり
からなととははなしはむしかうしに
まいこいろあはしきふきよほのかにみえつらしね 真忱 万葉
も[illegible]んし 物怨 ものうらみ也
んけさたく 閨膳 遊仙窟 無心月 元字
ところへとこえしかと
強 又健 おもしくしけなきなり

うかさんかは 不見人ゝ應笑 白氏文集
ふかつくりしくは 殺 文選
いけさしなり
いかさらそ福也 詩ゝ着敬悠敬ゝて多依之般はたる也
はつくるいとしく いやこゝぬ也 速く
たらむ 大梅 指
よねにわるしきさのかはものはにはしおやのなのうらむ
よねわりてあむしとにわかものは十にこえけにいはらをかくり
清君屈指 白氏文集第二
まんりはまつりのてうく
臨時祭調樂 十一月午日 小陣揃 振屋有儀式有饗膳勸盃
みそれかつ秋 霙 面宮 東下
これもまた海のうつりかはつてとふる

班 礼記 わかつ 分散 頒別 八雲抄云あからさまにせ
へたゝりとこそしらはまるなりなし
へまかりなるを 或説入るありとられ 両説
すなをなるうたくされ
媚心（なまめかし） 伊勢物語 世俗よ凡えうとふは極めてしたる称也
火乃かげの色にそしる 宋
耿々（かゝやくる） 残灯背壁影 白氏文集
あきらかにしてさししのぶるとて 机帳帷也
さうしこ 正身 方 正真事也
物うとこりせて 消息（アルカノチ アリサニ） 日本紀 白氏文集
かくやとまり 由隠 或竜字
和泉式部 うちなからの風こそふるさとしたるとみゆれ
一説 捉不盡 たなる柳かのし

あはしこは物らてわたえつる風ともなりてかく秋らのまさに
風うかうて色に
さうなを世はてしにさぬへきあるなりこつけしにまかるさむ
かくわりもて男女の結びにてもいかにもさる枕に
あくのそよはいうくれかなこそせてやうかくるい秘りせんと
ゐそのまこさてみゆへ
伊行大輿入 これをせいわならで素弱ひつるまさらすなうさ
此奇へんこ六斗つるまへは嫉妬乃人也 秘説あり
たなれぬく
古今 おりぬやこまことを世をねへぬいふ柳ふこさまでそ逸さ
ぬれる姫こふん世につきなしもて七夕代の中に松かう何く
後撰 龍田姫は染成すれ 七夕は裁縫なれ
ひくるかくは秋のなるのる立田姫お葉をしうちや山姥うるらん

同閑談
秋るゟ七夕にわかしくてかゝめ夕きこゝあへとそ〳〵
乗し春ハ佐保山姫の事なりくさらハ山の霞を分るよ
せらく書と染神と云秋ハ龍田山の神の事なり乃く楽
を詠そ者故よ秋をうしろ神と云也又去神の也但書也
龍田姫乃方角よ行の梅方にはほのこさハならぬ乃色
立田姫採なこ武紀を風よちるゝ秋乃ちら姫ハ不見也
うれしく　うらはかしくせ
露乃くえそく乾ゐる
縦（ハハ）光業（ニラハ）列 不見　日本紀 光業ハ葉の今ハ叶也
みかしらしすく御 事 神のなき乃
とちあるハつむりて　遊ぶ事也
こや君それわかるへきにとくかりしへれると
去く　屢　論語曰屢（ル）者數（サク）也 ねゐとさらぬゟ也

大納言乃ゞ忠よ侍りやまうし
此大納言ハ人手若太る故又也
れまゝうれぬらうり
吹風よあつくへきく秋のもこ之へかゝらこよこつてゐ
沈乃物（指迷）のうへ二面月になかれにら絃
沈よ月乃みなゐとよふ　伊勢
三子みくれへてまへる月にハ我宿也て納河
やくゟゐ　去ちはりたり
山えゞりハてゝあさるし
活進日笛漢武帝時丘仲所造長一尺四寸今時所吹笛者唯有
七孔風俗通曰笛武帝時丘仲所造或黄帝時伶倫造之也云々
又日笛滌（テキ）蕩滌邪穢納之雅正　録文曰笛七孔長一尺四寸三孔
造暦云伶倫（ホウニ）造笛　此乃故　吾竹學鳳凰鳴者也笛有十二孔也

二孔闕而不傳其九孔者以出五音龠曰笛本四孔少高声君明
復加一孔於下ニ為高音後出兼旧則五音畢備也
けふしれと
もゝみ舟のかよへしもとしみれとまゝしこゆ
律 催馬楽 もゝみ舟のかよへしとまなり
らくなうてさゝらし 絃
和琴に絃鳴調ありそれなるへく倭琴也 和琴ハ伊奘諾
伊奘冊尊此時令作出給ニ云 仍諸楽器乃最上ミるへき也わつま
ことにつまを云也 鴨長明記云 和琴ハ只ハ弓六張を
其後に琴を作る也 伴弓ハ上総国乃古語也
彼国古注文云弓六張神楽料矣 日本紀
此て 感情
とにてもやと 篁下

庭(?)のしみらうへしくるゝ後なまれなとさ(?)あと
秋ハこゝの宿にハなをたてふくれふ人ハなし
妖子 嬴也 一説不婦 謬説也
たゝ秋の月ともえたつぬ宿なり
定家卿本ニさくし出てかハむ 釈(?)本ハ月也
あされれハ 餒 臭し 論語 鮮
あされ同事也 河の魚ハさうさ(?)れり
さうせうさうんてさてうしに色て
風俗通曰秦声也或曰蒙恬所造五絃筑聲并涼州箏形
如瑟不知誰改或曰秦多善箏者故曰秦箏釋名箏施絃
高箏〻然或物云漢秦帝使素女鼓五十絃琴帝悲帝禁不
得破瑟為二十五絃一丈三尺秦始皇時破二十五絃為十三絃今
箏是也昔以竹造之其後以桐造之

おくハおかへき萩乃露ひとしこほるゝ玉篠の露

古今 をりてみハおちそしぬへき秋萩の枝もたわゝにおける白露

八代集にハ露ハかならす玉とよむ也うへにハさらに

あくまて 八百と物云けるにくしまるよう袖也

ちりぬるをとはさりしを むかしとなり

山のかひにさくらのわかれハわかれはてたる志たつ枝

古今 山見(ヤニカワ) 上観 山勝 山下 下人 尼児(アニカワ) 柏木(カキホ)

山のかひさかゐにへつらけ行くらへれしと云ぬは

出た稲とさらに鳥のはつ地 繞(キラウ)わすれぬ也

山となそしことも見えまゆらうるさに出たるとも

さらにいつれいのまさるへしことくとつくらへる

古今 それをはさらにとをきてハりそのわすれとつくりき

秋乃やわすれしも萎かくともの山をみそしに

和奇序 撫子をさらにしらえてうすくうへしわかりし常夏

鐘愛抽衆草故号撫子艶色衆千年故曰常夏 家経

後撰 うちはらふ袖も露けきとこなつに嵐吹そふ秋もきにけり

玉にぬくともまたしなよの常夏ハちりこし露のかゝりけれ

さはらしめん 伶俜(スイラウ) 又龍鐘 流離(スイラウ) 日本紀

已忍伶俜十年事強移栖息一枝安 杜甫

なりひまいりて 纏

昼くなれて云ぬ 玉蓋乃行田にて

伴にくをみ乃わさにつてわれらふ女のあたりにて

人なつもすれしほかにて移なしわれんと

人なの秋なつらむ

古今 うちわたす遠かたにハわれにもの申すさくハ

後撰十八 あたなる露ハたかゆへに腹乃こなたに

涙のしつく物ハいて思く胸ハこかれくらし海
燋心 燋身 大集経 千思千勝契一念一心燋 拾仙序
本朝文
三教指帰云寧慕術婆伽之燒胸
一寸如灌之心胸中三火消之一年不乾之涙袂上二両収
なしとくさきらひ 種
こちしすしく女をいふもしとされハふきにくしかし
大吉祥天女 在金光明最勝王経
吉祥天女ハ端厳乃天女にましますれハ仏眷属なれハ怨気つ
きてしつくしとえやくらかしいハうかれや
しつらめのしはらくさきとさん
両道 冨家女ハ軽其夫貧家女ハ孝於姑と我ハ夫家しとみあるらくて
天下ニ云正聲 恍耳即為娯 人間ニ云正也 恍目即為妹
視之非桐遠 貧富則有殊 貧ハ為時所棄 富ハ為時所趨

紅楼富家女 金縷繡羅襦 見人不斂手 嬌癡二八初
母兄未開口 已嫁不須臾 緑窓貧家女 寂寞二十餘
荊釵不直銭 衣上無真珠 幾廻人欲娉 臨日又踟躕
主人會良媒 置酒満玉壺 四座且勿飲 聴我歌両途
富家女易嫁 嫁早軽其夫 貧家女難嫁 嫁晩孝於姑
聞君欲娶婦 娶婦意如何 白氏文集 秦中吟
むこゝえらむ 宜
世さいの人 多
風病 又肢病
あか日やうたちをみもわれたるちたちはるしとてしそ
延喜式云八十種草薬廿種草薬中蘇是極秘草薬也
又食薬と雑薬との
さらしもひくしらい 雑事也
たいしかよわふこまかなるぞ

載鬼一車何足畏 棹至三峡未為危 前中書王

雉丹 伊勢物語

むくつけしといふはいつくしきことなり 蠢 貪 白氏文集

伊勢物語に大和の国にて女おもしろきなれとも むくつけ

くつけきものゝことはにてむくつけきすへてやわらかならぬ

わろきかたなる 淺惡

もとものくさきとこしめしもおもひはにまかせぬるをとの

ふりなるをよくしりて おもふにいとけなしいやしくれ

論語曰 知者言未必盡也 大辯如訥 老子經

三史五經 みなしいさゝかと

三史 史記 漢書 後漢書 五經 毛詩 周易 礼記 尚書 左傳

伊行尺ニハ 三史五經ニ道とゝさて紀傳 明經 明經にてなせり

五月のはしめにはひとつのわさしなかにあやめくさのこしなれ

もえねよ思ひやりぬるをもとふさを九月ふえしまいつさしれ

よ絲ニ月ぬゝゝしニ也

五日節

聖武天皇天平十九年五月庚辰天皇御南苑觀騎射走馬 是日詔

曰昔五日節用菖蒲為縵 比來停此事 從今而後非菖蒲者

勿令宮中 金谷園記曰 楚人屈原字靈均 為三閭大夫 被

讒出而隠江畔 遊泊羅水 而以死 即五月五日是其死日也 後有

長沙人歐回 於岸屈原在其間 謂回曰我今受飢餓 君留恵相

否 回曰何物 原曰要竹筒盛食 粽葉塞頭 不然即以楝葉裹

之 五色絲縛之投水 蛟龍乃得食也 不然即被蛟龍侵奪

人云 祭令我皆不得食也 回依言祭之 原卿食見而射之 今

人象之 以為竹筒粽及蘆葉裹米 俗作粽 及与楝葉粽并

五色絲繫之

九日宴
月令重陽日菊有黄花　天数九・秋数九　仍曰重陽見周易
平城天皇四年九月九日幸神泉苑賜命文人賦詩賜物有
差寛平遺誡曰五月五日九月九日文人武士行事繁多不可怠
不可緩
續齊諧記曰桓景家九月九日當大災可以盡家　長房云登
高株茱萸挿頭折菊花浮酒将攘北災桓景暮而歸家内
雞犬牛馬皆死房聞之曰此免災
きくの露と花
菊乃花露にたちゆくいにしへの神のこゝろはいはぬ
ちとせ人ありけれありさ海を　前大臣事也
なつかん
中神也　或長神　一説元　元行説也　天一神也
金櫃經曰天一立中央為十二将定吉凶云々立中央之故号中神也

件
仲方古今可遠来也　見尚書暦　安家説　陰陽雑書
或曰初日夜有方違者次々夜不忌初日夜無方違者次々
夜件塞方不可宿云々　家榮抄
又永久四年十二月二日縫殿頭家榮依法性寺殿命令注進之天
一方俗謂之長神
己酉日在艮六ヶ日　地　卯日在震卯五ヶ日　翔　庚申日在巽六ヶ日　鳥
丙寅日在離午五ヶ日　雑　辛未日在坤六ヶ日　康　丁亥日在兌酉五ヶ日　馬
壬午日在乾六ヶ日　龍　戊子日在坎子五ヶ日　亀　自癸巳至于戊申
十六日在天上　佛
海の人　展季　又真人
わかの海にて
たちかへりやまとしたゆらくてありかへれ
わすかへし一瓜をとかせくやとこうせそ　二瓜

あなかまものしやみゆるは 二條院風俗歌

二條院

陽成院を二条院と号す 脱履の後御所北院

二条ハ北大炊御門ハ南油小路ハ東西洞院ハ西也 京都名所

准據なき事 一事たになし

なかはのわたり

今京極河原是也 見李部王記

栄花物語云中河辺よれ北堂をとられ 法成寺 東北院也

舊記曰京極川二条ハ北中川といふ東川 賀茂川 西川 桂川 中川 京極

さうれいのことに御ふかん

賢 あはれなる

あさましく 退

なめけなるこしや 滑 無礼也

きよらしきたましこゐろかいかく

清(亘)也 史記曰衛伊封布茲清徐廣曰茲者蓐席之名序

日本記 御座 円筵

おほいよ舞ましきのとし

わらしさるかりもろこゆるさへそれわりく

たゝれれの光をなくしよへ主あわりしハやさしれ也

さうしさるかしと光の桜のさしへてしてのならはぬ諸ニ凡俗云 案有

こなたとよろひへくくやしこ为

喧響シトヨモ 日本記なしとまようり記へとつさある也

仍有音也

あらはれとめり

ひとてしにつくりて物いはしも

むへり 執當世継よ御のをしへりそりし御てゝおり

ちらけうは　弁言(サイゲン)　也

式部の宮の姫君にあひたまへりし御かへりゆかし

これらにて推量し奉るも也　歌院事也

まうしはかれいくかりかるも　方由

くれの御かく

かなしく宮などのたまへるに弥やすらひに指遠の杯

らな対ともの調也　花明抄云わらはあそひ也云

わたりちやうしへにてはなれたまへりてはかの御杖

あはれなるとの給へはすこしけしきみえてきたるをとこ

しこ御りてまうしゆ

和加伊戸波止波利帳於毛多礼太留宇於文義支文奈世元己(ワカイヘハトバリチヤウモタレタルヲオホキミキマセムコニセム)

余世元義以左可奈余奈余与久元安波比左多宇加与久元(ミサカナニナニヨケムアハビサダヲカカセヨケム)

安波比左多宇加与久元　催馬楽呂我家

おてくりめく　媛妍(アテハカ)　日本記

これあね君屋うとものらんおや

真人は朝臣らのたのみ

よりかくて　不意(ユクリナク)　式人思はず月本記(シモヒノホカ)　式流無為也　謬誤也

おろくたてしや

あしや　下屋　雑舎也

君しにもくし給へれかくて流みてしあひまいり　指遠

いふのりし時人代へてよたな流みてまくらしいみん

まの節を御つる　地蔵也

たら鞍人地し紀あく　指南也

いりかくこうて給つ

あるとしいうかくいふあり

んこうくめしなこけうしめ

年もあれとも人はたへてしんさくにたれり
月待は　九也　物待夕紀毛
志てよるはもよおひとく　陽
けやりめく　細許（ホソヤナリ）於仙家　みし徒　小蝿（サハエ）はへまとはらいは也
なさく人すはらく
たさく乃人也　次字とうし候也　月次也
やうりけなくて　云動　うこきしさせ
いゆくらうやうくあさとて乃葉ありけらん
古今　れお仙也
若ゆくしらう　不也
とうなちゆらつ　押立
うひこと　初筆
わたなりけるてはゆう　深わくらなくしをれ也　又涸

なよ竹乃よゝし　二句
万　山の嵐のはけしさにたえぬをとそしく袖にかなしき竹の
古く　竹の世のなかは人を物思ふことたえぬる世をはかれ
なよ竹なとくへて人行われてあはれゆくを竹に
二句　ありしにたえぬ也　ことはりの竹也
たけもあなたん　鶯　そとふうちのみ也
ありしなかうら乃はなく
古く　花入と物あらしや世中とありしなかく人我もと思ふらん
ゆう物りや
万　見よさらちせの公の渡ゆ人あらん都もてふゝ今とし
尺さしなるもそう
古今　それなるはある事とて秋宵と尺さしなるもて人のさかくに
さしく　二句　うらく二句たち

あしくしうちみんなおもしろくもなくて
數鳴 わきまへなきのうちせ あくのうちにといふ
おもしろくあはれ 事也 周章(アハテ) まどひのあしきこと也
色々の笑ともみえたり
無坂(おとゝ)の男は女の笑につゝみしく傷笑はくるしとたり
哀罪に悲しく傷られて笑つゝ笑をもしはなれ
そこはかとなくて
共に起 勅文 いとゞ我が身のとゞまるべくもあらずとはしりなから
世のなかをみなくしてまよふ
継母間事類
讀君援蜂(トルトモ)君莫援 饗君父子成豺狼(ニカラウト) 白氏文集 此外和漢例多し
あてなる人にはあらぬめり
妙人(アテ) 高貴人 伊勢物語 ...

大宮殿とよのこみそろりしあくがれつゝ人々よみもとて
衍ほとよめくゝしみなさにもとせり
めく夜なきし
無詠の女一首くりかへさらん美しみならぬ哀書
泣く〳〵しおりく家く 追従
あこいもし 君子曰 争犯而不校也 五常損通乃字
かりくるる 下くまさ人々に
年ノあはれほとい 西月
又のみくしけさん 衍運殿 別當
内外豪家不眠なし裁縫所也 項儀院ト云
唐人を紫宋問らの人を云也
人さけて 不遠也
うれしく 憂

しもんみんにこそすて　云々
みくうなんよし
不用　しらねこりしとかせくちむ　第木本先達也し尺むり但大わハ用ち也
くゝ木し
手定文家云合
それ東やみせやにみゆハ扨おりこハられ無ね衣る　後上覚別
綺向云枕云くゝきしにとろ木の葉の中におハりきてかけ
てことくして重ハらねかくらわてられハみねとら也
顕昭云信濃国乃木賊や木曽や云所み森のりし乃姿まよ
そめくみまはなき木に似たる木の花乃おかしを立わ
てられそ木ハみなとうんかはへつらうここには也
くゝ木りこと也
家成同家云合　奏候判詞云昔風古記をみなみら
しにこそ此くゝ木の空しハ大略ニ侍しらぬ年ら

みゆりありてくるくきくしおほはゆらて絆木ら扇懐
信乃国園にそれつふかやこ云所よある木也そて
ららきとるてみゆる屋りみくらくられハそれ似たる木
とその陀ハあるとハ重てあるある物よりもまくゆ
一説云杜木中にくら一本侍まりそ
美暦云合師賢くくささたとるや八陀くりおくるそ似
侍語抄云はさに二乃編あり一本第木常の枝ある也
の杜てとしもくて枝乃中にたくさにある也それとて
ろんもある屋にくる枝乃下ゆさてられハ木ヘりもりそ
てみんある也一ハ第に似たる木也の杜なある也
こあこ河みハあるやうみゆくらくわて重ハしとらせされ
みく法ありこれハとあさ海おりみくくろし此所
云々抄云けし合たん挺みる絆る枝ろ信乃国みそ木の也

家にも右のあるにそこに哉の あるをなくこれは延て
第一に編る末の梢にも移る流くらてこれは世に諸
也とは末にたんと移りしつけてるとも分て合へ
しくら移りしみえとしてやもて前にはやうに宇先にて
ことも此事或流に付枝第末に編る末ありとそにて
はそにさ也みて三句にくらにあるの末ありとつ句り
或は又件第末は葉の宗傾にある物なりこれと家
乃下にしてさてらは末にかりに句みてと也とて移延付
流と先
と縁より　雲鶴
さらにおもせと　さらはにくあれて[illegible]也
あらたまにとさに蛇
カシコニ
隠宇也　おもしろし也　又哭

華一　空蝉
うつほとし身をもぬけて末のなにはせ人のうつせみ乃句にて　小
巻華事
こかの物縁に身にしてもは是日祭文字五ふ乃の葉花
の便前高をしてあり又演枝乃物縁と云物のなに一指
是則なり凡此物縁の華は指一個より付事と云と
横竪あるを月つきにてもとをそこに移るなるに付たり
これと竪に華とをつきさまやとに宇蝉乃の先とあり
也是は奥入にしに二乃華とあれと第末に流せるものと
くしあると一流とやく目に宇にてり華一第末と是にこれ
二枚にて、此りにしるつて此華は横竪あり奥てうかまて此
筆屋華生は一句の横乃華せらるへ乃物縁の華は横にみより
演枝乃華し唐と目出このるを月時にありてあり是し

横也凡並乃字義ハ横の義なるへき也奥ハし彼横乃意なり
中院先書云尚書之篇の序ハ孔安国乃作にあらす孔安国序
漢常與合於著幽並穆合於皐陶謨盤庚三篇爲一庚三之誥合
顧命本也云々これハ今乃並のゑたかふなる也並比謙
返方并配是亦皆並の心なりの似たり廣韻云并ハ合也又詩賦序并序と
ひけり是古今家説にハ序とあるへし後ハ同余ハなくさに序
と後せこれハ今乃並の心にて聞わけ給へし

うれしくも　暇哉　慊哉　日上日本記

たくれと　将討　或方便

あやなし　ここらハ若也　万葉云思若とあり多也也
万葉ニ風の若とありまた風とも見ゆ也

まさこそ乃うらかたとくしこさ
久方ハ名也とて月緒くの風にこそまかれらん

ここうたに
博物志云堯造圍碁 音朝字爲作 碁此間云五　一云舜造
晋中興書云圍碁堯舜以教愚子也

これあやのふかくこころなるなみのあれにさきく
これあやハ紅の色ここさせらへするくなれさん 軒端荻
たへさら浪しの所よりいてあれのこころひとあり
北壁なりの入のと衣ハなくらさんとなりこさ人のことかた
とハ深くなれしとあやめくらくなくのこそみえ
をくとハ月宮よりしらのねなさたの合せめ也
くれなゐのこころさきの色の徑　禱勝也
そう色のゆくなし　傍側也　あくハたなるも也
うつハ我徒云又れ人のあさもしハ好んで世されにさやうに
はうらくぬしけりとしの

ゝ給ふ人のかしらつき　尖なる也
ゆりかはる人の程ハとこそ見けれ
下儒也　説文　紫式部
陋義視統にてゆやさらにくとハ流まてかくやうる也　假名記にて口伝あり
むつましう　亘　回（ニコトニムヘシ）亘　漢書諸
なまさん指　圍碁綴也　又闕
んとけ女　人疾也　人くやう也
さうしまは　早速　いそいそしく拙さいは神也
こはいりさうとし　劫（亦字）わかしうる也
むらむらとさうしめくとゐみつよるなしかうふふさ海
請君屈指数　白氏文集
なかゆみるしたくしう海しうみ桂
伊予の湯桁のゆきゝハいはくいさもすちやうともやうとも

海らやうにや君そあらしや
温泉記云豫州温泉者其勝冠絶於天下其谷蕎関谷中矣粟
出自山頂溶々逬于海中底自砂潔四隅青岸鋭朝宗是之
支討辞海二三里観其温泉上下區以別要以卒貴賤不混
誰故也上則播廊宇開六鋪其裏條扇息居内之其下糸
岩岸樹其間虚浴風湯日之氣由是来者無憚浴者有便　以下依繁略之
与州おはしゆの湯桁湖中よりあつ湯のわくとまりなり
七の〻七十七ゝんやきる数五百三十九歩
然とてうしろめたうもあらし　二女
目乃瞳ふか相せ次目よ手おかれく見ゆり
一説云晴くるゝいはゐの人頃云　此説謬也
替をれわかり
たゝすまゐ也　後成の世流かゝりしるらん也

わかの家　いまの世の人の世になりし上にあれわか詞なり
むかしのことを今にうつしとおもふこゝろなし
かいまみ　伊勢物語　覗其私屏　日本紀　垣間見人方　闚　伊勢物語真名本
伊勢物語云その里にいとなまめいたる女はらからすみけり
この男かいまみてけり　つき日のかくれたるを
このたひ　今度（コタミ）日本紀　上つかたを古き日記あまた書て
継若書れたり
紫のうらはまろく秋のかせ風なることよとて
六帖　風吹と人めかたいて戸はさしわすれて春まちて出ぬと
人わたをかけにてはいれるとおもふまし
君こふる波の床の衣の人もまちかねやかわ秋おく
秋のはなの見ゆ夜は秋見えられはかならすにはなる
なるらんすてよ

奥入ニ本ノ心ハ花ハミヤノマヘニウツルトミテ人を見ト思ヘリ
橘花ちりにし露の花のこの花の散にしよりはなかなかに
うきし　はなれぬるは　詠源氏集云
廿二　夜ふかく見し秋の夜のひかりこそなにはこのそはとなかりけり
これも紹巴も分かり
いとすくは　要脇せ
七ヶ　あはれしらぬ物かたりいとまなきしみなり
日くらし露にてをさまりたる秋かぜなれはなとかしら
人のなたこ（と）からしやうつの事はあはれにもおもふ
古人もいひけり
すへくしらて
直に朝夕につくしき人のなさはことさらなる
人のかはりにまかりなんや
蜻蛉日記云すへくしく秋のそらのあはれをしらて

これはさきくらの御代はあれ
なきなしのある
良風集 女乃さかとかりて見りて見えそて
無常ゆゑをさとこてらかにかをみ渡女うらするさへ見ゆる
そくしたるいす亀しくしありせ
たりと
侍者(シモト) 白氏文集 郷許 新様玉花 杜仙庭云 従楽 楽ハ 従せ 除せ
大鏡云 つゐふのさ様の物かわるをたりとはとれさは
あくそをいる
和泉式部か童名を御許丸といひけり
これとは御ゆるしありさりけり
列行列乃也 わ様に行列なりせ
うれはをまかにとえてくまりまゐりにはすは人のまへのして さるは

うたよみは蟀乃壇(ニタタク)也 文選に蟀蛄とありきりぎりすとよし
なりと衣よりにいかめり一義に磬蟀としるす蟀乃声
磬をうつに似たれは也 後撰云
おもへく御代鳴くらしとうらみたるさま見えられはきりぎりす
人にして
いせとあまのとりけるなりや 人毒
(奥入) くれはしや伊勢を海士のなま衣をうなりと人やうらみん
そこの山は御代のあまの衣をなりと人やみるらん
後撰に伊勢(手)網代女のりにくれてきてかりにつらそれとあり
海る未ゆ人をさるさことなれく
(たそ)枕り海る人をなさ地浅をあへるりしたる
わさはくにも わさくくなかき人の浜
(万)わたへとるに衣わさくしに應にしくとはつら錦の非

月
うこそ花おさ　此表はさんことにつゝしにおもしろ地して
ありけるなりとかなふしと敢へしと物かゝ孫と
かゝることも地にもあや世中とありなりに我かこれしん
おくぬされありし海し寸愛　哥仙窓　娃婦月
古操にゝさ露乃木こしれて出んよかて　紬　なか
此哥伊勢集よも花哥古来よりし伊勢物語にも紬て
徳よりも陽うに書て万葉哥にあるありあさやまをを
さへられかのよ介あと又もの上に露をとものゝ古哥乃
もかへ今に此文よりくるゝ…母からいへし
作く哥今に一月也源義物語にたさ…
あきはもとしめん…
頭よ天文字…又此物語…
二みらん哥しも上句歌字女御乃集にも花…勝…

亜二文類
三位中将女於父兄記藤麻遂光源氏之奇之綱海之季
六條よりも九折しのもありきへるへ　寄（しと）
六條御息所　秋好中宮母儀前坊御息所　在所也
中将御息所　貞信公女前坊御息所　後よ童明親王女かうへ北側に
斎宮女御母　大臣女御事一月也
伊勢物語にしも…にて後から宮…
ほよりにも…
ほよりに…

大弐乃めのと
乳母　職員令　有乳母比紫亦曰名師子亂其父…乳母
華嚴經云檀波羅蜜爲乳尸羅波羅蜜爲乳母文字集略曰…
弁色立成云乳母知於毛　乳人母也　或曰傳姆　唐式曰皇子皇孫乳母…
史記傳云武帝小時東武侯母嘗養帝壯時號之曰大乳

母ト令記曰天孫取婦人為乳母湯母及飯嚼湯坐凡諸ノ神部
備行以奉養乎干時権用他婦以乳養皇子乎此世取乳母養
児之縁也　令曰凡親王及子者皆給乳母（謂若内親王嫁諸王而生子者不在給限）親王三人
子二人所養子年十三以上雖乳母身死不得更立替　古今集
作者紀乳母（陽成院乳母　大江高綱女）

五条わたり

伊勢物語にしるし書五条あたりなる女をええずなりにけり

これにて

竹とりにもあれは名にふかき物語母は秘かに実名をかくし
たとへは此物語の母は名字をしもせず事まれなりけり
らぬ清らぬなへつのふらるに兵衛佐つきたる（示侍）紀中惟
光良清は揚名介申文也又は此名は言はず也紀元九条大臣御記
天暦十一年三月七日看南間文紀鶴所由惟光朝臣一為兵監也

其詞次才桐遠云く

此外寛弘比此名字あまたありけり

藤原惟光　寛弘元年正月百名任常陸権介　同六年三月廿日任任中務少輔

平惟光　長保六年正月廿四日任左馬権少允　寛弘六年正月廿日任左衛門権少尉　同七年二月十六日任左近将監　長和六年正月九日補蔵人　見権記

大蔵是光　寛弘元年十一月七日任越前権大掾　冷泉院御給

葛井是光　寛弘二年二月廿日任周防大目　左近衛府當年給

藤原是光　寛弘三年十月廿日任美濃権大目

此内以上三人は作名也

又御堂関白申文云　良清　惟光申揚名介云々

おもひのほかに　路　新路　日本紀　大路　万

（万）東は日本の柳をとりて揚くみ進は銘入せまりけり

けとらし　半蔀

二見とも世にけ源　顔蝶（オホノコエ）

若須と成りきみいさされとおいへる三日月のみな也変化乃
物まさ此乃に忽しにおつるなとといへり也字は陀大自神
泉苑乃長角みなく変化の物よりられけるみいさ此乃忽
ちる時んなきさ入るなとありこれはことわりのむやけ
したまはおそれとも也

未とハ花やかん乃風かする　諸職尸　なもれ
いろくいさし二十
古く
世中ハ流くるかはあるてもの乃かく新を海やとて宿さへし
玉れるてたとも
なにおんほ玉れるてたるに八宝むらくて人宿にやするる禄女
こきりもくみ流れ
芸州梅女云良三位の流れるして極妻まにハ女れは紀
大蔵金式花のとかなこて物なりハま陳苑乃前女ちらし

忽ちかを梅えへもくら
昇晩朱年宅開眉見君
強開笑口展愁眉　以上白氏文集
蜻蛉日記
かとくに君かぬらてあるおれハ柳乃まね梅ハ両かりかる
紙ちるノハナリ
古く
うらわる流をせるゝ人あ物中もて我て此へにちるさきれハ
なにわるおもと
此本欲ハ梅花せされとるちるさはへしん女付てとハ
文数乃紀女思ひとしへられかかたり
新らいちし
聖徳太子甲斐乃黒駒母今斎行て空をあそびに奉
川勝一人新馬乃口女さゝにさて
これもの乃色

北面伎面せらるゝころ三月尽日也柱仙宮にまいりてとさふらふ
られことゝあり
古今 ゆくはるのたそかれにほふ君かれはなちて花のいろ
後撰 山風の吹つたへくる花はこのことのもとなる
このもの事二条院の御時人々によませられけるに後成
範兼なとゝ八一向にゆくへも山ふかくしとぞ詞あり二戸也
参議清輔朝臣祐雅の和歌所にわすれいのちのよりこの
後撰 吹のまに〳〵の花也 ならん山かぜふく人のうらもとや朝臣 見顕昭撰
定家卿撰集抄にはこれものゝしるし也　宣旨に
数人也筑波山にのぼりてよろしくあれしはたにへ事
さ事なり文子家和歌所撰集也其筑波山に登り人の
らはつ也の紀貫之大嶋行幸和哥所に召しもて
にこゝろのもとにまとゐあつこゝろのまゝにもあり

むねくしかわね
不定とは 宗 廣韻云 定也 本也 尊也
さひまつられ
古 おもふみくゆる人の家の紀には名とく枝はかわらし
されし所にこら
尼通なる所にこら也 後撰には御うきれ歌とはかりし 詠歌
祐也 枝うしみと君のうたへ也
しろこさあふさめてさうこうしたくる也
後成卿は哉なきとは黄梅のちなしくありし何也
一流しるさ扇乃ちはまゝ昔也あられ
紀貫之紙きうしの也くま 錢
かさんたり 不便 なんたる也
物はおや紋 後月 又黒白 文月 文なきあやと綾也 毛詩曰 萋兮成文

一 ちかく

時鳥鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

清輔の奥義抄云黒白もしらぬといふ心也さればそれ

これにいへるは紀事也やうは葉は中にあやたるあひて

しみさる事もなしかも大宮とされしよりて[illegible]こと

たちかへる古人しかりの慈覚奇奥山のことにいへくれ

はしんあやめをも宮のわかれに顕昭密勘抄云定家云

錦織物と様く絵にて奥のゆくゑもすゝ紀物にとくなし

わきめぬこのめさるの紀みてつふわ[illegible]みるよわかれし

くらかしる時人よ又ゝ日かしのわりとくに紀家にし

あらんのを繕くしくいふ[illegible]かなましにこも地元とつ

しなどされいあやめもやすかれぬとあやめもてとこそ

そのとされし

阿闍梨

安慧 内供奉 天台座主才五 慈覚大師の弟子 始補阿闍梨

とくたゝらう統ことまとまつるのにに

又其紀事也

一説云いまこの紀氏源氏大伴のかれとの家にをりて

ましまおことはいまなりけるなり

ちる格ちなしうと 循豫(タユタフ) 万葉唐土にあらん也

にこしの全てつしにほうとぬりて

受戒也 藻生(ヨシ カハ) 又沽

これ志な代のこゑあて 九品上品上生事也

まるは 綱儻 日本紀 遷 延喜式 禎 いさゝかくるめあらん也

ときしるは実さしつさてことくに[illegible]ぬ称也

一説月の前にてもこの月のありたるところ也人のいふと

紫めいのはゐるさをてつさとらはれたる称と云也式文[illegible]

あはしおとして庵のつま遠後各わかれにおかり
わか行をしるべし

人となり
長柄（ヒトヽナリ） 史記殷本紀 為人（ヒトヽナリ） 月呂后本紀 長性 為性
ゆかしさもなくしるよしもなし
伊勢物語 老ぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほしき君かな
業平 世中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため
あさましくて
心あらんかしこき人也 あらまほしき事也
えんと濃なり 郷宿世明
[illegible]白露の光を[illegible]
[illegible]紫苑[illegible]白菊記
心あらんいづれの光源氏とやうきみちられし

この行く女には哀れをしりての也 詞かくしてみなれし[illegible]
これとなくこれを[illegible]にありて又[illegible]
を長人またる事秘伝あり
てもあらぬにも様へにさこそ[illegible]
うれしく 唯婦 日本紀
むかしありける[illegible]
あらさる事を 病者
長う[illegible]人[illegible]
伊勢反云 諸国人也 源乃人[illegible]官也
権記云藤原常直申楊名事云然者不限源氏人歟
奥ノ云此事源氏并一雅義也此可執知事揃往古除目楊名
あるへし[illegible]其家にあるへき[illegible]
此事家之称構蘭菊各之不究爾源當流為家深奥之統

條為殊秘說在口傳焉
ふところにて　或好事者募以錢帛　孝経序
ちからの　腹強　兄弟　日本紀
たくかとみゆるをとこなり　下物
ありてうるはしくみめかたちはのくちびるの花のかんばせ
花容　玄　万葉
此字は文字なりてうるはしき事なりければ花となる
とも又車にかさなりにしてかれは其義もあるなり此
古来俗にうつくしき人をはなのくちびるとしたり
て花ともいはばうつくしきことといふなり
わまえて　嘘アラ
津さる乃月　内藤松明
かなしかりけるは

古く
冬されば賞するものはりつはにして花見ありてや人乃情あさ
芳野は勝るの武又賢し芽なり海なりて春遊ぶ　異　万葉
伴家持朝臣春若和並ハ芽と云也　異羽 ケチルハカリ　日本紀
あさけてなり　朝明秋　又旦開容儀　万葉
且よこのあさけの花くらるもてぐ宴のはと云べき
あさ庭のおきみてあさよこのあさまがたちふもれば宜
なりし花乃ひまん
古く
冬なりて春みのなるさかれるなつさくらの花はおほ
ちりくもつれのあとくらり
延喜式　禮シヒラ　霞禮ニ衣也　内匠式云　駕輿丁禮ウハシ　勅文
栄花物語云女房まゑとくもりうへ也ちふもちゐるなり
ゆいつまくらり　ちぬかいはる衣也
人のかほよくはよく御しり　佳人 カホヨキヒト　日本紀

まつられ　とこしへにまもらんかせ
年預(ねんよ)人同しかせ　周章　調行(てうかう)
んあわたゝしくて　あはつ　燥
なけきてくれたまは　あはつ旅なり
秋のゆふ人のうちなれんたくに
又　本わりくらの月の終れはんなれ秋はさよなり
人のなかのこゝにくるはさうしこのなかにしさなん
わたりかへしてなくこのなかしかせ
とれつく　雑色や
あはん名はりにかはらうとしかも業や(さ)にけれはなかなか
世かなはまてあはん名のりくみうきあは解かわしくとも
名はりにかはなこともこうれへし業苑あのさらは
そしの蒙也業苑ハ庵しとは裏崩本なり

もろなさけあかねふかれてはれいはかへやと○はかりさや
おほえかくうなしいはそ峠ハ海しそたさておくら人
乃花のむしに食とめかること
なかや　中屋　俗ニ中居と云也　や廿五百通る
たかの花のもかなからわかる稀ならかいはかりかなそつくんの
あめの海こそれく
うつはし　手撥
かし　手橋
せんのよたにむ人のいふこと橋のたやとうら橋かるとそ
そうきの稀ならはしくもれこされ
岩橋のうへくしぬへしはなはきつゝ休
金峯山縁起云役優婆塞金峯与葛城峯為行道於両山石集諸(国)神令渡橋之時金峯大神不勝呪力与且作始之葛木一言主大神又且始作申於行者云自於(アランノチモトモミニクシ)寂醜夜間作之依無略之

おとゝめりもらい　小舎人童　小舎人は童也
くろくしたれは　細碎　日本紀
なれまさりて　襤褸　日本紀　白氏文集
あやしの人　氣裳人　又仮相人　日本紀　寒月
かりのやとり　倚衣　新猿楽記　伊勢物語
むしろなんとてなんをかく　短褐　旧事本紀

中関白為大将之時語奇深之見并女而忘給之後彼女奉恋大将日暮参也南面笠簾謗居然間直衣人奇香甚入来彼歳女有恨忘合其後夜々来但暁夕無車馬声而成佐以長緒付針着直衣袖朝然緒留於南庭樹上其後又来是鬼魅之所為矣古人天載此事謬也中関白大将間天延貞元天元比也而寛弘以往卅年事也彼云又至一条院御宇故生也雖称昔事況准延喜時代者弥以参差歟三輪明神者倭迹々日百襲姫命

日本紀乃ふるきものかたりのつまをしるしぬれは大神のかたちは
みえしてよるはかりかよひきておはしましけるを
ひめ君常にあやしみおもはれけれは
しはしとゝまり給へとありけれは
ことはりなりあすのあしたに君かくしけをみせんとありけれは
あくるあしたくしけのうちをみれはいとうるはしき小蛇ありけり
衣紐のたけほとなるにひめきみおとろきてさけひ給へは大神はち給ひて
たちまちに人のかたちとなりてひめにいひけるは
汝我にはちみせつるかなとておほそらをふみて御諸山にのほり給ひぬ
ひめきみあふきみてくいてつき居よりはしにてほとをつきて
[illegible]
陰而薨給ひぬ　[illegible]

とのよこ成くりよりハ人はくりよりハ神はくる大坂山ふを
たらひくれくらふいわらこにいろ油て人民わいつい
年邊借してくらよ附乃人よみくさかさうにつさての
く絡なハしりとぬらしにさはうえんて

先代旧事本紀曰大己貴神娶天羽車大鷲而覓妾不見
妻備下行於茅渟縣娶大陶祇女子活玉依姫為妻往来之
時人非所知而密往来之間女為任身之時父母疑怪問曰誰人
来耶女子答曰神人状来自屋上零入来坐共覆臥耳于時父母
急欲察顕績麻作綜以針釣綜神人縫裳而明且随綜尋覓
越自鎰穴経茅渟山入吉野山留三諸山当知大神則見其綜
遺只有三縈号三輪山謂大三輪神社矣

わされたり家ハこれ同事也
いれはきのこさつねるなりしかな

狐假女妖害備後一朝一夕迷人眼女為狐媚害則深日長月
長溺人心 白氏文集 古塚狐
名山記曰狐者先古之淫婦也其名曰紫化而為婦故名自稱
阿紫
玄中記曰五十歳之狐為淫婦百歳狐為美女又為巫神抱朴子
曰王榮記曰狐及狸狼皆寿八百歳満三百歳暫変為人形
帝王系図曰欽明天皇御宇参河国狐成人妻之事水鏡にも
此事あり

わらさへよ程なせふもらてはの云へしわくろこさ命わ遠
伊勢物語
経しわさハこさ名木くぬかくるもの秋の鳴てさるなりつ

なりはひ
稔 農 同項和名 東作 嫁穡已上同 農業日本紀 田宅同
ふるくとけの祢らこたよろくしうふくかくろと

おく
わきもこか家路ちかくし峰赤もやすらはて沙牝の付
蜻蛉日記云完くかわ松風の声もたえて秋ふかくよる
かうもり　碓（カラウス）　音對　亦作石　踏舂具也
偶到山中宿　静向月中行　何処水辺碓（タイ）　夜舂（ツク）雲母声　白氏文集
ゆくりかに　枕上
ちろちの夜ゝのつきあはれなるとと
しづさわる塚
手毛なるのきりくくと
季夏蟋蟀居壁　月令
壁蟄家々音始乱　叢芳処々菊初開　菅家　万葉集
叢辺怨遠風聞暗　壁底吟幽月色寒　頌　詠蛬蟀
これもろくれ竹
墻根よ枝ゆふなしてとくなかの竹也清かし居竹なとあり

屈（カニリ）折（クシケヌリ）孤生竹　銷摧百練鋼（カウ）　白氏文集
うき世のよゝのうきふし　篤実也　葉
ふしたちあり
ふしわかるまつわかれしくるゝこそやうきふし（ころふし）のみつゝ
字あり
ふしけさり
ふかみかれの緑のかけ　万葉十三短哥
明玉集　わさもしき竹とこそ金山は金峯山にはしり
竹嵩八金峯山なり清少納言枕草子云かれなりけれは
たここれふるけさやうきんたてらさこゝわかつうち
わかねよるくてつきとこゝりし地とにようこそ竜なん
前代ゐかにこゝちくるとそかなてゐうかれてう
ちかたるなくかなわろうさんなかはとつとこゝおぬれ也

ぬかつく 額突 頭首也 額拜也

あひおもはぬ人をおもふは大てらのかきのしりへにぬかつくかこと

地祇布之五額拜加良受毛

あさ露のこゝのまゝまとゐもとしきゆきまいかりかゝこ

居累卵之危而圖太山之安朝露之行而忍傳世之功蔡公

人生一世若朝露之託於桐葉耳其而有何宜不惑哉 後漢書列傳卅九王允傳

七十而致仕禮法有明文何及貪榮者斯言如不聞可八九十

齒落双眸昏 朝露貪名利 夕陽憂子孫 白氏文集秦中吟

角云當來導師とそたのしかの

全對尊は過去之釈迦現在觀音當來弥勒也弥勒出世乃時也よ

そのほさ今まてのほの釈迦仏みなけ指をに弥勒を

礼とも弥勒は尺迦乃付属をうけて一生補処菩薩にて

半十撮劫乃のち兜卒より下生して成佛して三會に法を説

ほつさ故當來導師とは申也

うるくつとこのみ法を聞ては世しみの經をかたなく

涅槃經云若有善男子善女人諸根完具受三歸依是則名

為優婆塞又曰若受三歸及受一戒是名一分優婆塞優婆

塞は俗なる佛弟子よ入入也比丘比丘尼優婆塞優婆夷と

まうすは佛弟子とこそせ

うるの山の
うはそくかたるの山寺のみちとあかそつくしところにておくらん

長生殿乃うちきぬのはなてく蘇とはさしなかは

むこさしなくく

七月七日長生殿夜半無人私語時在天願作比翼鳥在地願為

連理枝 長恨哥

らうへ世ゐつのよ

一 後人尊入滅至慈尊出世隔五十七倶胝六十百千歳 往生要集 新婆婆

弥勒下生経ニハ将来久遠於此国界成佛 経文略之 と说なり

こゝろなし　あらさん也

いさよふ月は根くりすゝわくのまむことは

万 山乃はにいさよふ月ハいてんとまつゝをるに夜ふけてや

いさよふの月十六夜の月の異名ハ月出かゝりて

ぬなとゝ也こハ唯りこれて十五夜の月よりハ十六日月

こはらむしりつゝ遠く但結同類抗めしいさよふさハ山乃

端よさし出る月を いふといへりいさよふハ進退を

らぬ緩也代様ときまり

万 ものゝふの八十宇治川乃あしろ木にいさよふ波の行衛しらすも

月 君やこん我やゆかんのいさよひにまきのいたともさゝすねにけり

かくりくのはつせの山の山のまにいさよふ雲ハいもにかもあらん

これらもやすらふ心也或説云いさよふハいさよふハやすらふ也

云猶いさよふと随ふこゝたの説あ未断或今代乃万葉に

も不知夜歴とかけり又十六夜にハよさらきよ也

ねくりすゝ　不意 月本紀 卒月爾

水原抄云こゝりあへぬなるれ云々

寮し不意乃義ハこゝりあへぬ心ちも思ひかけすなり又

卒爾とも今乃人のみハいひけれ

なにかしの院

河原院也 六条坊門南万里小路東 五条ふるきともゐのしれ

院こゝあまたいへる也 桐叶御息所先蹤也

彼院左大臣融公旧宅又号六条院後ニ宇多院御願也

延喜御記云此日参入六条院件院是故左大臣源融朝臣宅也

大納言源朝臣奉進於院

あつかり　諸院に別当記あり

御記云天暦七年閏正月廿八日令講小野之盛（幸）嶋院（冷泉院）頭事
作依講以之感令補訖
とこう
ちへ紫侍　たまひてかのくに詞也
一説絃管頌かよ五音横通字也蜻蛉日記にもたなかこさし
ちいさくしてよわり
ことなし　下家司
むきなくは（万）
まかるよこさ中川ノ絶ねし君かこころのつきぬや
式云たきなつくは石所也たきかみ川（森川）にしたり水東林こさい
松川ハ勅のあれし平林乃川森川ハなかの事なり
それこそ君かこころのほこしさにさなやいさいへ御乃頌尭西院也
まかいとうにのくさ林乃など御はかく

其ハおれて人ハうつかしなか事也延之難き林なりき
色うつりたるあかるしなくして（曹司名也）
書アリ紀天暦三年十一月廿七日己刻冷泉院別納小失
火此外諸院等並之別納ハ別建の屋也別納かく大饗
こなかなる事あり小寝殿なり
家あく　氣味　又氣和
たらかみてし思てかくあり【れ
光あるところ久しかうハ露ハかくて河乃なかな
此頌源氏と光あるところ今ハその月なくなりけれ
しとなかなかに松みなハ林乃人々わかなるやさしにたつき
きみかわくにありてそみなこう別ハ源氏とみまりこい
ふなうありそれなとこにつゐてしも露乃光やいうかなと
それなるかあるからにつかむへしきかのかなと世乃なりなら

けふとてやひらくるとてやへてみかきも光
みくるわかなとこそおもひなれ
ちりぬる君にみえしものなさしやかくれは我らも
あまのかるもの
海人の家
こは浪のうちよする世と浪に浮かなれは宿しらで
あさりせし　あまのとま衣
しをるゝなり
たく
あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世とはうらみ
いにしへかたりに　集　日本紀
そのかみ　副川
たちよりてみむ　横刀　タチ　日本紀
山をこそうちすてゝ　山谷
たく
おもひをくよしく　紗まし山家のうち山ゐふかしことにも思ふ

六帖
なき人のとふにもあらぬ山ふかみなにゝかゝるなみたなるらむ　つゆけさ
あまのくに
伊勢物語云こちかしこにちりかひてなくしにけるを
きゝなり　秋きりの立つにつけてもあきかせのふくにつけても
玉のをとこのことみえしものの代
露霜のをとみえし死れの一なり
いにしへ　情
うきよは　殿上集
月花のかくれみて
ゆき　かはとなみてみなと移れし秋も過ふこと思きさに
東に遊ぶ詞不叶古今秋の人のとふともよ世すめ
ゆき
たまくら

瀧口　在御溝近邊寛平被置衆十人廿人随時儀　無内官　有殺食退月ナし　見西宮抄

拾遺　弓弦

わたはらしら野にはいとりする君のあつまりてやむとそする

火あやうし　誰何火行[ヒアヤウシ]　史記

本朝月文粋云夜行孫夜々驚火内府中呼曰大危彼誰須臾

夜行舎人　烏喰有三欤

うちとけて寝るをもまつとしいはぬ君はかしこくしも名のりけり

中ハ海ふかくさとなるを聞つつまちうきねのみぞ

西宮　実一刻侍臣名對面　延長元年　同実一刻侍臣奏之後瀧口武士名對面事

延喜九年五月廿日蔵人源揚宣旨云宿瀧口輩二ケ夜以上無故不参莫早頓着到宜侍後作矣

中将

丸といふ名はむかしはまろなり　又男子通称なるべし　何によりて

大寳元年乃比高市朝臣麿石上朝臣麿紀朝臣麿なと

いふ人名あり　前氏の家にも京家にも大宝

麿と又何丸と云名も時々続日本紀なとにもみえたり　去らは

人の名字の下にまろとくつきたるもあり又後

人の名にも丸といふもあり　されは名字をかへさる

物をもいふ麿にはかしかる姓氏録にも柿本氏の

先祖の麿とてありし又子孫にも丸ありさらに又子同名

はあしくとかいはれ世今の丸とかいふなりけり　通称は

きて名のりたる姓をいはれて子孔子也師一両已とあるなし

むら物語にはにけりとなりけるにはいさけりと

寛平法皇与京極御息所同車渡河原院歴覧山川被勢入

夜月明令取下御車畳爲御座与御息所被行房内術

之間聞淫龍之亡有出声法皇問給對云融小欲賜御息所
法皇召合之此在生之時為臣下我為天子何得出此語乎早可
退帰者霊物抱御息所御腰未死前駈等皆候門外御聲
不可及達牛童頗近侍召御牛召件牛童令召人々舁寄
御車令乗御息所顔色無之不能起立之抱乗還御之後召
浄蔵大法師令加持纔被穌生云法皇依先世之行業為日本
帝王雖避宝位神祇奉守護追退融霊也件法皇腰有打跡 口訣
わらはん　我為須　我子とのことく云
家らは地とくなりて
人の身にハ魂魄乃二類あり三魂ハ肉を守り魂也天人の
姿なり五陰離散とれハ生るゝ所に陽生魂也七魄ハ死を
守るなり七魄死体乃うへに五六歩はなれて地めくり廻あり
これを無想法身と観也十三年ハ本有を修となり十三年
までも屍にちかくやすらは魂ハ魄を待侍る也
らぬをとゝめけり地をとゝろくなる也
南殿乃鬼のゆかりのたくひをひやうしかし
世継云此殿貞信公也ハ法皇の御時より御後見にて延喜
朱雀院の御時よりの御なかに宣旨うけ給はりて　おこ
なひに陣乃座さまにおはしますに南殿乃御帳のうしろ
の程をとほらせ給に物乃けはひして御太刀のいしつきを
とらへたりけれはいとあやしくてさくらせ給へは毛はむくゝと
おひたる手の爪なかく刀の刃のやうなるに鬼なりけりと
いとおそろしくおほしけれと臆したるさま見えしと
念せさせ給ておほやけの勅宣をうけ給はりて定に参る人
とらふるハ何ものそゆるさすはあしかりなんとて太刀を
引ぬきてかれか手をとらへさせ給へりけれハまとひて

うちわたしくらうとにもなさてすゑかりけり 大鏡

しくし 蠡

けうとけなるとりのからこゑなきたるもなこさ

ゆふしろふはこれにやとおほゆ

梟 古堯反 説文云食父母 不孝鳥也

梟鳴松桂枝 狐蔵蘭菊叢 蒼苔黄葉地 日暮多旋風 白氏文集 五言詩

うこんは物もおほえすきみにつとそひたてまつりてわなゝき不動

火はほのかにまたゝきて

焼亡なとかよはしくて人の目にかゝりし一説焼亡

華事類

ありつるかほにぬ物めく

風のやゝありさるやうなる 慶の方はおもてもさらにしらぬ人也

そわせたまふとをくしらしめ

[illegible]

いとかうあさましきめをみるらんとて給はゝよとしくれかりけり

奥入云此哥近代説不足説云後拾遺現存六帖返

まれなりぬれはかくら

ようちすらむ 不例

宿直人あらはおきてよくまかりてゐよとてすゝみよ

わか大事なるは 宿事類 儀なるへきなり

伴擣物語云たゝかはしとゐ事とそれ又ありたし

かさてみまいらせおありつるまいらせまかせ

ちかうあなる人とも

くつろく 眷属

こゝかしこく 弐雖

日本紀曰水神罔象女 罔象此云美都波 伊奘冊尊所生神

世髪白て老嫗物語といへり

後撰
年ふれはわか身そともなりぬらんかくしまて如月のかな
一説云こしかたまてはしりせくありて二人勝より
のちつくあふまてかしらおりて三乃腸ともとつまてら
かとくせ云し
系こうし
俗称ことたかこ云人弥生圍にいふこころ也
うむしかれ身をしてふく　上陸せし
類聚國史云弘仁八年八月従三位緒継白常子薨延暦年中授
従五位下宮車日安駕加家為尼太上天皇敬重之叙
病篤遺言氣絶則以席裹葬莫須時日指殺薨時年三十
左はかさ哉し
十娘日児近来患嗽頼声音不徹拾仙窟　嗽病　咳嗽　咳病
けさる身をかうつりぬる

ちそ
世中はいとしくうれけは深きおもふわさ如
かめ
薬とこり山乃みにに指遠方にわかれる弥
いしりいかく　云れ
うらみんみをうらくに　慈毛詩廿月志淫同
とさるかくすあさうりこし也
いをみとさゑこにかけとし　畏也　わかね標みつをのす也
わかり色かくさりん風りゆかると
山城國風土記云南鳥部里稱鳥部者秦公伊呂具的餅化
鳥飛而居其所森之鳥部
指遠後人云
ごりつへ山おみ煙乃かくさいくるかくみしらわれしたくらん
山ゐら　小萱
こ隣あくね会に
万歳身後抄云喪家佛事次葬送次荼毘無言念佛次回三

之別限佛事勤之佛経供養事以是之時稱讃以前之
日數雖何ヶ日分今夜可勤果也無言念佛滑十五功德之由
見聖教

てらくみやを 諸寺初夜後夜乃長講とて行也
修習善法無令失時初夜後夜亦勿有廢中夜誦経以自
消息 教経

きよミつ
千手経云不為非分自害死誦持大悲神呪
縁起云清水寺者在山城国愛宕郡八坂郷東山之上矣千手観
音霊験之地行叡居士孤菴之跡也 宝亀十一年初建立草堂
敢剏大本尊延暦十七年七月二日更雖造大佛殿大同二年又造閣
伽藍清涼号北観音寺堂舎之額清水寺題大門之額延暦廿四年
十月十七日給太政官府爲寺領四至 東限高峯 西限公田 小限大道 南限尾振谷 北限佛殿坂

上田村麿私宅寄附賢心号延鎮之坂上大納言建立之記略之

大とこ
大德（ほうし） 日本紀 粛宗剃天下名山置大德七人 僧之官德也云と

つゝみのほと 陂 隄也 蓄水曰陂 音碑 礼記注
纂要云築土遏水皆塘 音唐 亦謂之堤 音伍字亦作隄

あまみちのなくもふれぬへきなや

蒭 放埒
貞文
おもふことありてのちはかなしきをたのむなるらん
古にありしみやこをかへりみて
いはなみのたかきいはほにうちよする
優婆塞戒経云中流洗手文あり可勘入
あしはらのなかれてとほくかすみにも
かはのせにかよふあり

清少納言枕草子にハいろ〳〵さまにくるまきたる
わり源光行候成てみな裏ハ信乃分ちさり故ゝに
家乃附てにいりてあるゝは右を袖平乃附ゝ是又陰家事
也着服ゝるゝ人ゝかゝるゝかゝに清少納言枕草子に
こてとさりて故をとさ候ゝにハ事ゝと云ゝさるゝ人ゝ服乃義を
立領ゝて見とこゝろさ也へらり五毒横通乃字逸へ通て通
用つねのみるせぬゝハあゝかわくとゝろさ逆着ある
思て客乃善悪を書へるゝも也一說服取里欲主君乃服を
着事批把大納言延光一生之間着村上天皇御服不憚ある云々
さま例領候成て女ゝ何紅裸ゝ紅葉と北義を立ゝら中院乃
奉書ゝも紅服乃義を採須ゝ為
うらゝ此術ゝいつゝもあゝゝ此あしらゝも云ゝし
云ゝぬるをハ如西脚ゝし詩ゝにゝゝ往り

七日くみ佛を見せてとも
七日ゝ佛事経文多之地蔵菩薩因縁経十輪経等ゝにゝ
ともみ故ゝゝ山さとに
とみまつる今ハ根乃山里にまとかくとも色ゝ宿をとゝめてん
みの京み此程のもとし御ゝ可よ
東京西京 東ハ左京 西ハ右京 弘仁十年十一月五日府左右職各置二員
つゝらもと 鴿 和名云伊 信ハ追 本草云頭縫一次色也
以よ色人ゝと
是よそてハゝ色人みなまゝゝ此云ゝゝもむなくてゝをねハ云しょけ
健 菅家後集
ちくよゝ
女ゝさやゝゝに
陽體剛強自陰柔順従陽婦人有三従之礼無自専之義 五行大義 才三第七論徳
海さにあゝ秋と

白氏文集 八月九月正長夜　千聲万聲無了時　擣衣

よもすがらは衣うつなるべし

秋の夜のあかつきかたの君まちて衣うつなる聲のさびしさ

うちわたし世をしのびし物をあさぢふに思ふなる我

万葉集 うちわたしたる世にはつらきながらこそ秋のよさむに思ふなる

まに衣うつなる音をきくも

あやしのすみかにまよはく

後撰 小野宮 太政大臣にはべりける時のいさゝか物の侍りける

の萩の葉ならぬをたてまつりける

山里の萩の葉ことに露ぞおくなる

かりそめの又とあるまじき身に

こゝらの又しあるまじき人のなくなりけるを世にも知られ

四十九日御はての法花堂にて

李部王記云天慶八年正月十八日乙卯戌時宮主正五位下藤原朝臣

寛子卒年宮十二月八日當三七日於叡山東法華堂修諷誦

布施各香一裹備施錢万百二文

又おなじ日記云こ乃行ひは此法花堂にてぞ侍る

よき法花経を書てぞ乃三昧堂にて七日よさし

かの法華三昧堂 在止觀院西 弘仁三年壬辰四月五日結構秋七月

上旬土木之功甫就移行法花長講 延暦寺縁起文全篇略之

もとのやうなるせ　文章博士

みなもとのあきまさ　願文 日本紀

清和天皇貞観九年十月勸学院南邊更建一院号延命

院乃至自製願文詞多不載焉

まかへる願文をかき足其例欤

これ願文てかゝるよしは法事ためにかくなりて

云十九日まくハ中有みゆくよみあり七者六虎鳩廻ホ
定ゝ目造佛造経出迷ゟと云経文みあり
ゆこしにわらく　ところみわらく
おもひて　こゝろ
わかこなん　むつのる也　女子ぬいとのゆらく云
年わかき人也
あらし　清華
なむけ
鸎礼　又𩋾　碣　餞別送物也　又云平向　或餠　祭礼具足
ぬさ
麁麻　羇中にハ道祖神にぬさをたむくる故にこれを旅人の道ゆくよ
古来しけるや
音家
これをもぬさといふなりあやまりて手向山の紅葉をぬさにしる神のまにまに
黄帝四十余子あり最末子旅行を好みしこのみて　不留
宮中三旅遊のあひだみなく死ぬる時擔曰吾為神旅行行を守
らんといふ也るゆゑに祖神をもって今の道祖神とも也今のかう
旅の趣の餞送にいふなり此故也餞送の宴を祖席といふ
道祖神を世俗のさへの神といふ手向のゆゑに手向山の紅葉を云也
ねかしれ　根ならくあふさかやましして
帥隆家くるりの関中をわかるゝしなに麻とつりけれ
ぬさもいつもさの紅葉ぬさとしてもわかるゝ風のまにまにとしれ
たむけ　　　　
かまくらのあさこいろごみ　稲のかみのくちにいかる
せなめしつるにかくらいのこゝろのなみの波にうつすなる
あかしらて家に家の紫末をとゝのへけるきりし稲るみれける
ならの世三あたりの家の人をとのへくしかるをけるかれかる
人にいかにいかに頃
ゆうそひと月見ありける

色紙ハ定家卿の歌を色紙に結びしもの秋乃夕れの所

衆家女歌集

色紙ハしし絹まへ二行に二三句別乃句を以世乃場ハ
此奇同人何也物鏡奇古歌并和作ら例多く或又古今迄こ
見て今わつよのこ与ちやう并の色乃事を取り伊勢
物語奇しあ色みをりと裏蝶参に注解く
物のぬさこのふこさ詩こさり所為く
うにて定に何句多けれん世に行乃人此物のぬさこのあへこき世に